

## スーダンの有用植物＜その5＞

### コムギ

コムギが人類にとっての「有用植物」であることは論をまたないであろう。コメ、トウモロコシとならび世界三大作物と称され、その生産量はトウモロコシについてコメとほぼ同量の第二位で7億6576万トン（2019年）となっている。スーダンにおいても消費量で主穀の地位を占めている。伝統食ソルガムからコムギが民衆食としてしだいに普及する経緯については、過去のAAINewsシリーズのスーダンかつさら随想録＜その4＞（AAI News 88号：2015年2月発行）で触れたことがある。ただし、生産・自給面とのギャップはまだ大きく、輸入による外部調達で穴埋めしている状況である。政府が生産割当や融資・補助金等による作付け奨励をしてきているにも関わらず近年の作付面積は増加しているとはいえない。

またコムギに関連しては、物価上昇や為替変動による自国通貨安等の複合要因がもたらす経済情勢の急速な悪化で、コムギ粉が値上がりし、ひいてはパン製品の品薄となり、2019年の革命前夜でパン焼き屋に長蛇の行列ができていたことは記憶に新しいところである。その後、革命や騒擾等の政変が拍車をかけた財政難、ウクライナ戦争の影響も深刻であり、スーダンにおけるコムギの需給がさらに悪化するものとみられる。また、パン焼きは、10年前には電化されていたが、その後の物価上昇のあおりを受け燃料が電気からガスへ、ガスから薪へと時代が逆行するような現象まで生み出している。上述のとおり、スーダンにおいてコムギをとりまく情勢には諸々の厳しい面があるわけだが、今回「有用植物」としてとりあげるにあたり、最近の生産面での明るい話題や将来の可能性にスポットライトをあててみたいとおもう。

コムギはもともと半乾燥の冷涼な冬～春の気候下での栽培に適した作物であり、高温のスーダンにおいては生産適地が限られるが、比較的冬の低温期が長いとされる北部州やリバーナイル州北部でコムギ生産が盛んに行われている。そのため、

スーダンにおいては耐暑性品種の開発が重要課題である。筆者が、シリアに滞在していた30年ほど前にも、当時アレppoに本部のあったICARDA（国際乾燥地農業研究センター）に来ていたスーダン人留学研究員が耐暑性品種について熱っぽく語っていたことが思い出される。さらに近年では気候変動の影響が取りざたされており、温暖化による耐暑性品種の開発が急務とされる。現在スーダンでは、「スーダンおよびサブサハラアフリカの乾燥・高温農業生態系において持続的にコムギを生産するための革新的な気候変動耐性技術の開発」のJICA-SATREPS案件の活動が進行中であり、過酷な気候に耐える品種作りへの期待が高まっている。

他方、スーダンにおいて、小規模農家によるコムギ生産・作付けを増大・振興させていく観点から、夏作の新規換金作物との組み合わせ、及び輪作導入の考え方に注目が集まっている。しかし、そこには作付けにあたっての回転資金の問題や銀行からの種子・肥料



小麦の収穫風景  
機械化が課題である

の借受と物納での返済義務などの制約がある。したがって、コムギは自給用、かつ堅実な現金収入源となる反面、他に競合する有力な換金作物がある場合、一般的に農家にとっては収益性の点で必ずしも魅力的な換金作物とはうつらない。その打開策としては、油料作物やキマメ・ダイズなどのマメ科作物との輪作体系を構築し、夏作と冬作のあいだの効率的な資金循環モデルをつくりだすことが重要である。このような耐暑性品種の創出や有用な新たな輪作体系の導入が成されれば、コムギ生産の将来の可能性を広げていくことにつながると考えている。